

出会いを創るキャリア教育

(社会人講師活用型教育支援プロジェクト)～

●事業概要



(同事業マスコット)

近年、子どもたちの理科に対する興味・関心が薄れ、学力が低下するという「理科離れ」が懸念されています。「理科離れ」の進行により、日本が強みとしている科学技術の知識が低下し、進路選択時に理科系を選択する者が減少する等、将来的に研究者、技術者が育たず、ものづくりの基盤が危うくなります。これは、日本だけの問題ではなく、先進国共通の課題となっており、各国では、その対策に取り組んでいるところではあります。

経済産業省では、子どもたちの理科離れを防ぐ観点から、平成19年度より文部科学省が行う「理科支援員等配置事業」と連携して、小学校5、6年生の理科授業に地域の技術者やOB等に社会人講師として参画してもらい、理科の学習が私たちの日常生活にどのような関わりを持っているかを示すことで、理科や科学に対する興味関心を深め、学習意欲を向上させることを目的に、「社会人講師活用型教育

支援プロジェクト」に取り組んでいます。現在、沖縄を含め、全国10カ所の地域で、学校と企業の双方のニーズに応じた理科授業プログラムの作成・提供等を通じて、実社会と結びついた生きた理科授業を実施しています。沖縄では、この「社会人講師活用型教育支援プロジェクト」を「あまぐまリカちゃん学校へ行こうプロジェクト」と題し、地域コーディネーターである財団法人沖縄県公衆衛生協会が取り組んできました。「あまぐま」は沖縄の方言で「あちらこちら」「リカ(リッカ)」は「行く」という意味で、各地域(あちらこちら)の理科(リカ)エキスパートの方々が、学校に行つて理科の授業に関わっていき、地域で子どもたちを育てていく社会を目指したいという思いが込められています。

●事業の実施体制

平成21年度の本事業は、地域コーディネーターである財団法人沖縄県公衆衛生協会を中心に、学校現場、県教育庁義務教育課理科支援員コーディネーター、市町村教育委員会の他、地域の社会人講師29人のご協力を得て、県内25校、108学級(受講児童数3,599人)で授業を実施しました。

●授業例

授業の一つの例をご紹介します。「獣医さんの目でイヌについて学ぼう(6年生単元・動物の体の働き)」では、協力企業として「動物病院22時」の協力により、児童が獣医師の視点でイヌに触れ、歯のつくりや脈の速さ、レントゲン写真を使った骨や体の中のつくりを確認し、人との共通部分や違いを学び、雌犬の出産や病気のスライドを観て「生命の誕生・命の大切さ」について考え、学ぼうという授業を実施しました。

(授業例の一部を紹介)

単元名	授業概要	協力企業名
植物の発芽と成長	緑豆の発芽や成長について学び、工場でのように製造されてもよしになるのかを学ぶ。	有限会社みどり食品
水溶液の性質	ジュースの官能検査をし、その性質をリトマス紙で調べ、炭酸水を作る。	沖縄コカコーラボトリング株式会社
電流のはたらき	電磁石の仕組みが様々な電化製品に使われていることを確認し、生活とのつながりに気付かせる。	株式会社屋良電化ストア
てこの仕組みと働き	てこの原理を応用した補装具を体験し、てこの原理が日常生活で応用されていることに気付かせる。	株式会社佐喜眞義肢
生命のたんじょう	胎児の成長の早さや母胎のはたらき、出産などを人形や体験を通して体感する。また本物の胎盤に触れその役割について学ぶ。	たから産婦人科 助産師・保健師 沖縄市母子保健推進協議会
太陽と月の形	太陽と月の位置の関係や大きさの予想を立て、実験を通して体感する。	久茂地公民館 沖縄県立総合教育センター
人と環境	豚の糞がエネルギーになることを知り、糞から取り出したメタンガスに火がつくことを観察する。	いちかじ食堂



(レントゲンで体のつくりを学ぶ)



(外観を観察、実際に触れてみる)

社会に活きる技術と学校の

～あまくりカちゃん学校へ行こう

平成19年度から実施してきた本事業は、年々、教育現場、地域において事業に対する理解が深まり、教育現場と企業等の連携により、理科教育の充実が図られてきました。

子どもたちは、企業現場で理科・科学が活かされていることを実感し、さらに働く大人と関わるという体験は、キャリア教育の効果もありました。また、

●事業の成果と今後の方向性



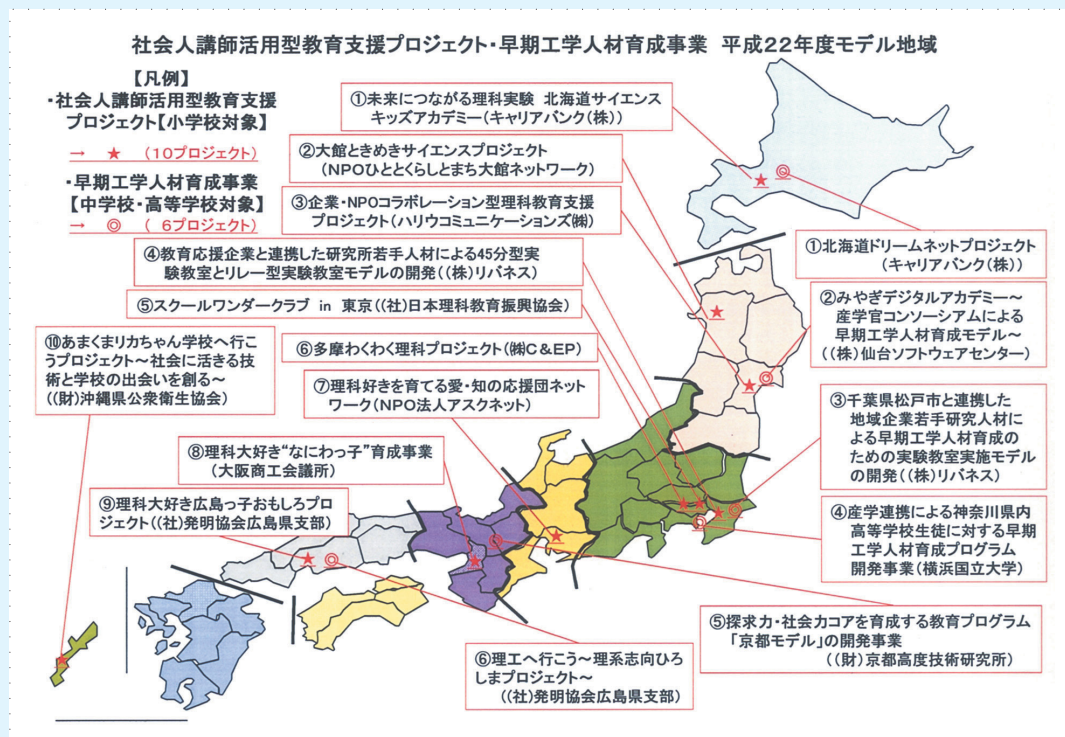
「ミツバチの行動を観察しよう(単元「花から実へ」協力:新垣養蜂園)」



「太陽と月の大きさを比較してみよう(単元「太陽と月の形」協力:那覇市久茂地公民館)」

各地での取組

*こちらのHPから詳細をご覧ください。→<http://www.shakaijin-koshi.net/>



企業等においても、子どもの教育に関わることで、社会貢献や働くことの意義、自社の理念を再確認できたという意見も多くありました。

「地域社会で子どもたちを育てていく」という意識が確実に根

付いてきています。今年度も引き続き、実施体制の強化や授業プログラムの充実に取り組み、平成23年度からは、自主的な推進がなされることが期待されています。

教師の声



- 教師が苦手意識を持つ理科の単元を外部講師と授業を組み立てることで、スムーズに、またより効果を出すことができた。
- 日常生活と学習したことがつながるという成果が見られた、これは確かな学力の育成といえる。
- 理科を通して、キャリア教育(職業観、勤労観、主体的に自らの進路を考え選択する力)、食育、道徳教育につなげることができた。
- 教材化の可能な素材発見ができた。
- 教師と外部講師が直接調整をするのは、双方ともに時間の制限があることから、コーディネーターのプログラム案の作成、調整役は有効であった。



外部講師の声

- 子どもたちの学力低下、理数系離れを深刻に感じていたところ、事業参画への依頼があり、その意義に賛同することができました。
- 理科は、「現象を解明」⇒「説明」⇒「達成感、学ぶことが楽しくなる」という循環が実感できる。自分で理論的に説明していくためには、基礎学力が重要だと自覚できるはずです。

